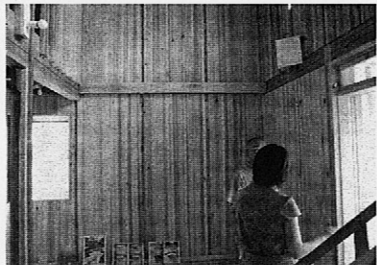


健康、環境にやさしい
パウビオロギーの家が完成

接着剤を使わないBSパネル

内装に合板や接着剤を使わず、ムク材を釘だけでつなぎ合わせた「BSパネル」を使った住宅が群馬県吉岡町に完成した。柱や梁の構造材にも地域材を活用、健康で環境にやさしい家づくりを提案している。設計はパウビオロギーを實踐研究する前橋工科大学石川恒夫研究室十ピオ・ハウス・ジャパンが行った。

地域材の有効活用へ
 前橋工科大
 石川氏が設計



地域材を活用し、壁、天井にBSパネルを採用

同大学大学院の石川恒夫助教はパウビオロギー（建築生物学・生態学）の研究で知られ、日本パウビオロギー研究会の代表を務めるなど、その普及に努めている。住まい空間を「皮膚」を「杉板30mm厚、壁紙は一

切使わず、木部現し十珪藻土塗り壁のみとしている。
 BSパネルは、杉幅45×厚60mmを釘でつなぎ合わせた壁材（非構造壁）。パネルの外側に50mm羊毛断熱材を入れ、900mmピッチで施工する。屋根もBSパネル90mm厚、900mm幅を敷き詰め天井意匠としている。

BSパネル自体が内装仕上げとなり、①接着剤を使わないためシックハウスの心配がない、リサイクルが可能な調湿機能に優れた自然の呼吸する壁②地域材、間伐材の活用が図れる④木材の使用量はBSパネルだけでも通常の3〜4倍、重厚な木の香りの家等の特徴がある。

このほか、ウイーンターガーデンには、蓄熱材として土ブロックを採用。これは天然の土と砂及び石灰を混合して固めたブロックで、着色剤を一切使用せず、天然の赤土と黄土による発色のため自然で柔らかな色合いとなっている。

石川助教教授は「パウビオロギーを踏まえ、自然素材を使うことで、心の表現としての色彩デザインを施した。BSパネルを使った住宅としては5棟目。国産材はとにかくどうしを考えない、どうしようもない事態になっており、BSパネルを広めていきたい」と語っている。

施工は林藤ハウジング（前橋市、林藤次郎社長）、木材納入は小井土製材（群馬県下仁田町、小井土文雄社長）が行った。